曲目について

これまでの公演は、初期の作品として作品18の中から１曲、中期の１曲、後期の１曲という３曲構成で行われきた。これにより、単にベートーヴェンの弦楽四重奏を６回で全曲披露するだけでなく、それぞれの公演においても、この作曲家の弦楽四重奏がいかに変貌していったかを概観できるようになっている。婦中における第３回公演においても、それぞれの時期から極めて充実した３つが並び、今日「聖典」とさえいわれるベートーヴェンの弦楽四重奏の片鱗を体験することができるだろう。

弦楽四重奏曲第１番ハ長調作品１８の１

ベートーヴェンの最初の６つの弦楽四重奏曲は、作品18として、まとめて出版された。そのうちの第１番は（森家の第１回公演で演奏された）第４番に次ぐ人気を持つといわれている。円熟度を増してくるベートーヴェンの中期の作品群を予感する激情の発露や強いエネルギーが第２楽章などに聴き取れるからだろう。一方でハイドンやモーツァルトから引き継いだ優雅さや軽妙さも兼ね備え、宮廷音楽的な雰囲気も残している。

ソナタ形式の**第１楽章**は、舞曲風の3/4拍子。冒頭で提示される第１主題はすぐに展開されエネルギーが高まってくる。これが落ち着いたところでハ長調による、なめらかな第２主題が短く提示される。目まぐるしく調が移り変わる展開部が続き、再現部では第１・第２主題が定石通り主調のハ長調で奏される。しかし終結部はちょっとした遊び心も覗かせ、従来の形式通りに進むことを期待するリスナーを驚かせる。

9/8拍子による、物悲しいムードが溢れる神妙な響きの**第２楽章**は、後のベートーヴェンの弦楽四重奏を予感させる。ハイドンによって確立されたソナタ形式で書かれているが、その表現はウイーン古典派の伝統を離れ、この作曲家独自の境地をすでに示し始めている。ベートーヴェンはこの楽章を友人のアマンダに聴かせて想像する情景を尋ねたところ、彼は恋人の二人の別れのようだと答え、それに対しベートーヴェンは「ぼくはロメオとジュリエットの墓場の場面を考えていた」と言ったという逸話もある。激しい情念も感じられる充実の楽章だ。

小気味良いテンポの**第３楽章**はスケルツォ。古典派の因習に則り、気分転換を促す性格を持つ。なめらかな動きのスケルツォ旋律に対し、跳躍の激しい動機と鮮やかな技巧を見せつけるパッセージが特色のトリオ部とが対比されている。

楽しさ溢れる楽想の**第４楽章は**ロンド・ソナタ形式[1]。弦楽四重奏が音楽を愛好する貴族たちのために書かれていた歴史を感じさせる。

弦楽四重奏曲第９番ヘ短調作品５９の３《ラズモフスキー》

作品59として出版されている弦楽四重奏には３つの作品があり、それらは依頼主アンドレアス・ラズモフスキーの名にちなんで《ラズモフスキー》四重奏曲と呼ばれている。弦楽四重奏の歴史において、この《ラズモフスキー》四重奏の果たした役割は大きかった。確かな技巧を持ったプロの演奏者を前提とし、華やかで自由奔放なフレーズを躊躇なく使うことにより（特に第４楽章は圧巻）、弦楽四重奏という合奏形態の持つ表現の可能性を誇示・拡大・追求したからだ。

ソナタ形式による**第１楽章**は、衝撃的な和音に始まり、たゆたうような楽想が続く。この序奏部と対照的に、ソナタ主部は闊達な楽想で構成され、エネルギッシュに展開する。形式こそ因習的だが卓越した演奏技法が要求されている。終結部にはベートーヴェンらしいユーモアのセンスも感じられる。

6/8拍子の**第２楽章**（ソナタ形式）では、冒頭のチェロのピツィカート[2]が作品全体を通して現れる。実に印象的な音色だ。これに続いて悩ましく気にヴァイオリンが第１主題を奏し、音楽を主導する。重々しい第１主題とは対照的に、スタッカート[3]や装飾音の付いた第２主題は提示部と展開部にも現れる。しかしこの旋律は再現部には現れない。従って、仮に第１主題をＡ、第２主題をＢと考えると、全体はソナタ形式なのにＡ－Ｂ－A’－Ｂ－Ａというロンド風にも聴こえる。

第３楽章はモーツァルトさえ想起させる典雅なメヌエット。交響曲では疾風怒濤のスケルツォを多用したベートーヴェンが第３楽章にこの

---

[1] **ロンド・ソナタ形式**：A-B-A-C-A-Bというロンド形式のうち、Ａにソナタの第１主題、Ｂに第２主題を配した形式。２回目のＢはソナタの定石通り主張（この楽章ではヘ長調）で提示される。

[2]**ピチカート**：弦を直接手で弾いてならす演奏法。音は長く続かないが、独特の音色を持つ。

[3]**スタッカート**：音を短く切って弾く演奏法。

ような舞曲風が楽章を配置するのは新鮮でもある。なお、このメヌエットにはトリオの他にラプソディックな性格を持ったコーダ（終結部）も付いている。劇的要素も加えてフィナーレへの橋渡しをしている。

第４楽章はバッハの時代にはオルガン作品の締めくくりとして使われたフーガが顔を覗かせる。ただし旋律を冷静に楽想を盛り上げていくものではなく、一気にエネルギーをたたみかけるようになっている。４つの声部が主題の提示を追えるころには、すでに無窮動を思わせるような活発な音楽になっている。

実はこの楽章はソナタ形式の枠組みに当てはめられていて、第２主題部は定石通り属調になっている。しかし明確な旋律は現れず、短い上行・下行動機の断片が散りばめられている（譜例参照）。

弦楽四重奏曲第15番変ホ長調作品132

第15番の弦楽四重奏曲は、1825年に完成された第12番に引き続いて着手された作品。1825年春、病気にて中断された後、1825年７月に完成。完成は第13番よりも早かったが、出版が遅れたため15番となった。

この作品で注目すべきなのは、病気による作曲の中断、そしてその後の回復によって完成を見たという過程が、作品内容に直接反映されたところだろう。いわゆる「自伝的作品」なのである。例えば第３楽章の冒頭には「病癒えた者の、神への聖なる感謝の歌」という言葉が添えられている。そのほかにも彼の情感や表現欲求が古典的形式を打ち破った箇所もあり、もはやモーツァルトの世代とはきっぱり決別したベートーヴェン独自の世界が表出された傑作といってよいだろう。

第１楽章は謎めいた、苦悩に満ちた静かな序奏で始まる。ソナタの主部は流れ出すような第１ヴァイオリンのパッセージから始まり、付点音符を使った動機（チェロ、譜例参照）で第１主題（第１ヴァイオリン）が構築されていく。第２主題は属調ではなくヘ長調。一時、喜びに満ちた楽想で曲が進む。しかし悲劇的な楽想は消える事なく、楽章を通して溢れ出る。

第２楽章は、通常では第３楽章にくる、いわゆる「気分転換」にあたる楽章。主部（ABA）
--トリオ--
主部（ABA）、3/4拍子。このうち主部はゆったりとした中にメヌエット的ともいえる優雅な雰囲気を持つ。低弦の上昇音型と高弦の下降音型が絡み合いながら展開する。トリオはきらめく透明感のあるオープニングを持ち、バグパイプ風に長く伸びた音と手廻しオルガン風のチャーミングな楽想が独特の風情を醸し出している。

前述の通り、**第３楽章**の楽譜には自らの病とそれからの復帰を神に感謝する言葉が添えられている。祈りのような穏やかな合奏（A、旋律のみを譜例に掲載）はシンプルな書法で書かれており、ルネサンス時代の合唱音楽さえ想起させる。これに3/8で力強さを感じる優雅な楽想が対比される（B）。冒頭の祈りのような旋律はポリフォニック[4]な扱いを経て展開。最後は賛美歌のように静かに終わる。

第４楽章は２部形式のマーチにオペラのレチタティーヴォ風のコーダが付く、いずれも弦楽四重奏には異質な存在（ジャンル）だ。役目的には第２楽章でなされた気分転換と類似しているが、オペラ特有のドラマティックな要素が持ち込まれている。

この第４楽章の「嘆き」を引き継ぎ、ロンド・ソナタ形式による**第５楽章**は（3/4拍子）終始緊迫感の抜けないスリリングな音楽。楽譜には「情熱的に」とある。第１・第２主題は完結した旋律にはなっていない。しかし何度も変奏を加えながら現れる第１主題は力強い推進力となっている。また２つの主題以外にも魅力的な楽想が随所に現れ、最後には苦悩からその克服を暗示させる劇的な幕切れが待っている。

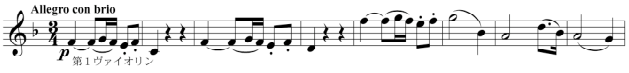
解説執筆：谷口昭弘（たにぐち　あきひろ）米国フロリダ州立大学・大学院博士課程修了（Ph.D.、音楽学）。これまで『新潟日報』『北日本新聞』『北國新聞』、雑誌『ExMusica』『音楽文化の創造』などに寄稿。2000年２月のＮ響定期演奏会の楽曲解説も執筆している。また1999年以来、新潟県新津市のラジオ局でアメリカ音楽を月一度紹介する番組を放送している。富山市在住。

---

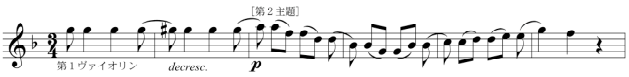
[4]ポリフォニック <
ポリフォニー（多声音楽）：複数の声部（パート、弦楽四重奏では「楽器」と考えてよい）が調和した音を使い、時にはお互いの旋律を模倣しながら、独立した主張として聴こえるように配慮された書法。

弦楽四重奏曲第１番ヘ長調作品18の１

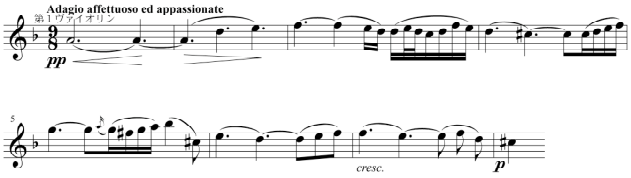
第１楽章、第１主題



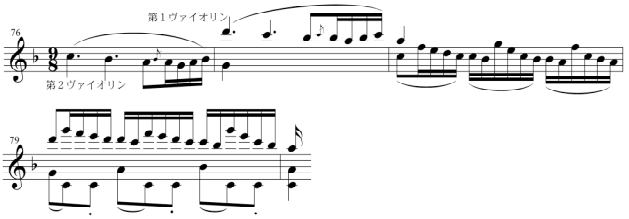
第１楽章、第２主題部



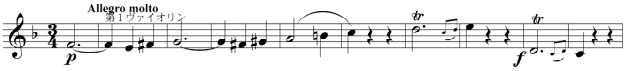
第２楽章、第１主題



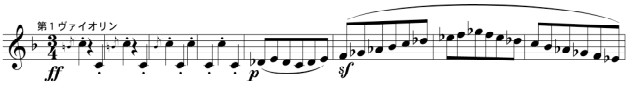
第２楽章、第２主題



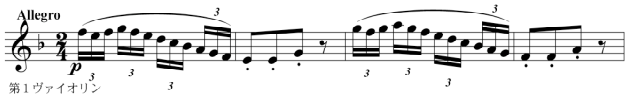
第３楽章、スケルツォ主題



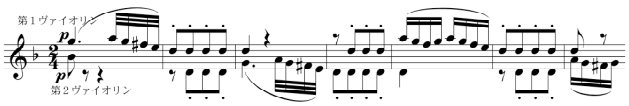
第３楽章、トリオ部冒頭



第４楽章、第１主題

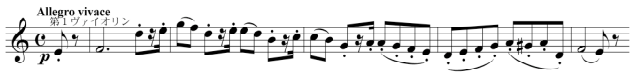


第４楽章、第２主題

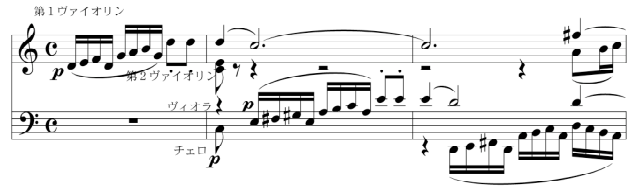


弦楽四重奏曲第９番ハ長調作品59の３
《ラズモフスキー》

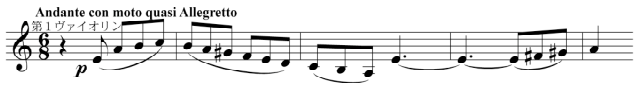
第１楽章、第１主題



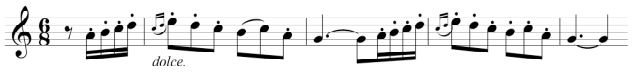
第１楽章、第２主題



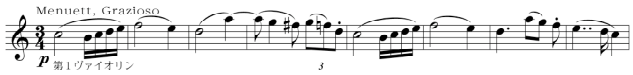
第２楽章、第１主題



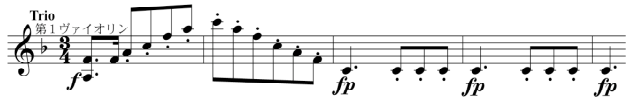
第２楽章、第２主題



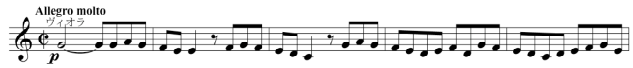
第３楽章、メヌエット主題



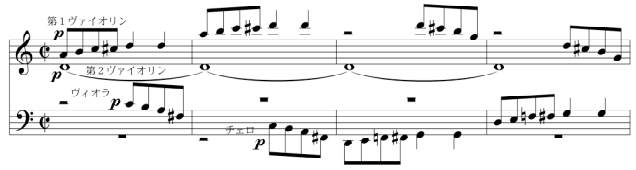
第３楽章、トリオ主題



第４楽章、第１（フーガ）主題

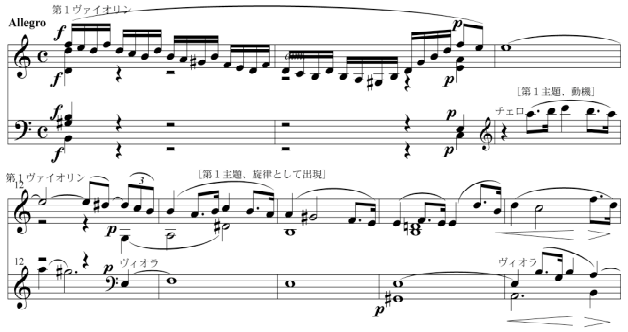


第４楽章、第２主題

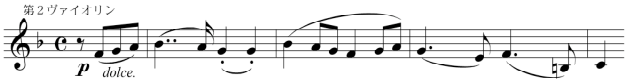


弦楽四重奏曲第15番イ短調作品132

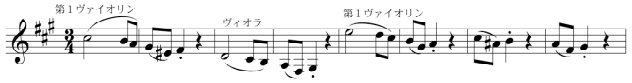
第１楽章、提示部、第１主題部



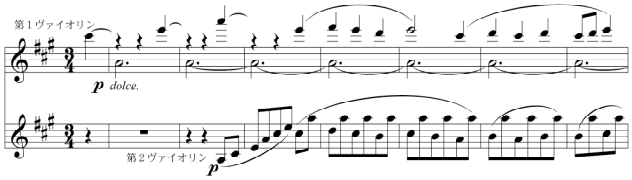
第１楽章、第２主題



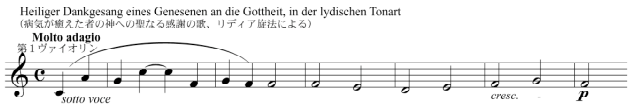
第２楽章、主部主題



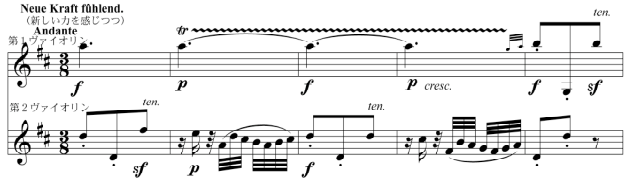
第２楽章、トリオ部冒頭



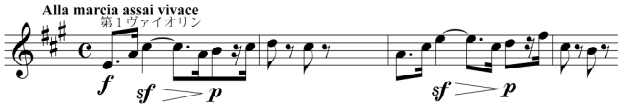
第３楽章、Ａ主題



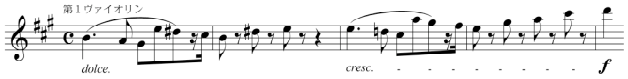
第３楽章、Ｂ主題



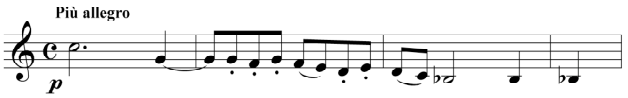
第４楽章、行進曲主題（前半）



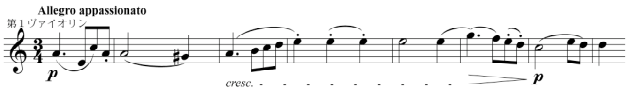
第４楽章、行進曲主題（後半）



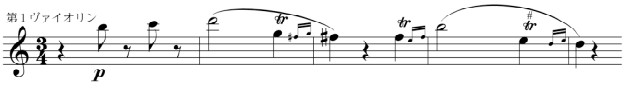
第４楽章、レチタティーヴォ風パッセージ



第５楽章、第１主題



第５楽章、第２主題



「天才」によって書かれた全曲

６月４日の『北日本新聞』に、「ベートーヴェン弦楽四重奏全曲への挑戦」という記事を書いた。予想以上の反応を各所からいただき、恐縮してしまった。

正直に告白してしまえば、この記事のタイトルにある「挑戦」は私にも当てはまる。西洋音楽史をアメリカで学んだ身とはいえ、ベートーヴェンの弦楽四重奏曲については、そのうちのいくつかを知っていたに過ぎなかったからだ。

だから今回の連続全曲演奏会は、私にとっては本当に意義ある企画だ。解説できるようにスコアを分析し、ＣＤを何度も聴く。そこで「ベートーヴェンってすごいな」と何度思ったことか。特に後期、耳が聞こえなくなってからの作品。どうやったらこんな作品がかけるのか、どうやったらこんなに型破りなのに面白いのか。

因習からはずれるだけなら単なる風変わりかもしれない。しかしベートーヴェンが型を破る時、それだけの意味が音楽表現にあるのだ。彼が「天才」だというのは、こういうところに由来するのだろうか。（谷口昭弘、音楽学）